

道草ばかりの私の研究

内 田 慶 市

もしこの点について、議論しようというならばね、それは、あくまでも原則そのものに対してでなくちゃならん。そしてそのためにはね、原則の理論的根拠そのものを、検討してみなくてはならぬ。(ポー「マリ・ロジェエの迷宮事件」)

気がつけばもう退職の年を迎えていた。27歳の時に大学に就職してからあっという間の43年間だった。

私は吉田拓郎ではないが、「今はまだ人生を語らず」をモットーとしている。が、まあ、ここで少しぐらいは振り返って見るのもいいのかも知れない。

思えば私が今、このような研究を行っていることも、さらには私が中国語をやっていること自体が実はこれまでの多くの「出会い」の一つの結果である。

高校時代、私は古典と漢文ばかりやっていた。それは担任の先生の影響が大きい。担任は皇學館大学出身のバリバリの右翼で、中国のことを「中共」としか呼ばない先生だった。昔はこのような、いわゆる「偏向教師」も結構いたものである。例えば、英語の先生は東大の英文を出ていたが、私が3年の時、授業中、突然「私は神を見ました」と言い始めたのだ。おかしな先生だと思っていたが、何とその後、統一教会の国際部長になっていた。何はともあれ、とにかく、他の科目は余りやる気が起こらなかったが、古典と漢文は好きだった。源氏物語や枕草子、徒然草など片っ端から書店で買って来ては、それを品詞分解して楽しんでた。文法体系に時枝文法とか橋本文法とかがあることもその頃初めて知った。漢文は史記とか十八史略とか古文真宝とかを白文で読んでいった。

そんな関係で、大学では国文法か漢文をやろうと思い、福井大学入学後、すぐに国語学の佐藤茂先生の門をたたいた。そして、国語学概論や語彙論等の授業の中で時枝の『国語学原論』やソシュールをはじめとする多くの言語学の書物に出会ったのである。『天草本平家物語』などのキリシタン関係の本との出会いもその中であつたが、佐藤先生からはそれ以来、学生として、また後には同じ学科の教員として言葉には言い尽くせぬほどの学恩を賜った。

特に「生活の中で何よりも研究を最優先させるべき」という学問に対する厳しい態度を教えられた。先生は常々「正月であろうと、身内の冠婚葬祭であろうと、1年365日研究を止めてはいけない」と私に語られたが、先生の奥様が他界された時、葬儀にも出席されずご自分のお

部屋で静かにお仕事をされていた先生のお姿は今でもこの目に焼き付いているし、ご退職後、ご自分の書斎を「福井言語研究所」として開放され、そのお部屋で書きかけの原稿を前にしてお一人でこの世を去っていかれた先生の生き方をいつまでも心の中に留めておきたいと思っている。

さて、当時の福井大学では国語関係を専攻する者は中国語の履修を義務づけられていたが、そんな理由から第2外国語として偶然に中国語を選択したことが今の私の出発点になるとは当然その時は予想だにしていなかった。しかし、中国語・漢文学の寺岡龍含先生との出会いはその後の私の進む道を決定づけた。中国語の勉強を進めていくうちに、中国と中国学への興味がどんどん深まっていった。寺岡先生との出会いがなければ今の私は存在しないと言っても過言ではないだろう。

寺岡先生はご自分の担当の中国語や中国哲学の授業の他に、中国語科、漢文学専攻の学生のために毎年夏休みと冬休みに多くの分野の非常勤の先生を招いて集中講義を開設された。たとえば、音韻学では坂井健一先生、辻本春彦先生、文法学・語彙学では香坂順一先生、藤堂明保先生、高橋君平先生、日本漢学の松下忠先生、思想では山口一郎先生など錚々たる研究者が招かれていたが、それらの授業を1人や2人（多くとも4、5人）という恵まれた環境で受けることが出来たのである。その頃は随分としんどい思いをしたが、現代語から古典語まで、また語学から文学、思想哲学に渉る幅広い「中国学」の勉強をする機会を与えられたことに感謝している。

寺岡先生は、まことに「頑固一徹」の人であった。漢字の一点一画をも疎かにはされなかった。「ごんべん」の一画目は必ず「横」に引かないと「校了」にはされなかった。私の卒論には至る所、先生の独特な字での朱が入っている。それは多くは誤字・脱字のためではなくて、「てん」や「はね」が不正確だからであった。そして、私の校正のいい加減さは今も直ってはいない。

福井大学には非常勤講師として長く宮田一郎先生が居られたことも私の将来を決めることになった。先生には中国語作文や中国語の作品講読、あるいは北京放送のヒアリングなどで「ほんものの中国語」に触れる機会を与えて頂いた。卒論執筆の際にも関係論文を大阪市大からわざわざ借り出してきて頂いたりした。その後、関大で同僚となった鳥井克之先生の論文を紹介して頂いたのも先生からであった。

ところで、私が大学に入学した年（1969）は、東大と東教大での入試が中止されるというまさに大学闘争のまっただ中であり、地方の大学でも少しのタイムラグはあるものの当然その影響を受けないはずはなかった。ただ、学生大会やデモ、バリケード封鎖、ストライキが繰り返されるという騒然とした雰囲気の中でも、そこから得たものは少なくなかった。「権威に盲従しない」で自らの頭で考えること、些細な事にも熱い思いを持って集中して取り組むことといった態度である。

そして、全学ストライキを打つ中で数人の仲間と自主ゼミと称して、魯迅の『呐喊』や雑文集と毛沢東著作選を読む会を開き、辞書を丹念に播きながら読み進めていったことが、私が中国語と中国に真正面から向き合った最初であり、大きな収穫であったが、何よりも、三浦つとむとの出会いは大きかった。

三浦つとむは教育心理学の参考書として『弁証法はどういう科学か』（講談社、初版は1955年）を読んだのがきっかけだったが、その後、『日本語はどういう言語か』（講談社、初版は1956年、現在は講談社学術文庫に収められている）『認識と言語の理論』（第1部－第3部、勁草書房、1967-1972）を始めほとんど全ての著作と文章を読破した。三浦から梅本克己や黒田寛一、対馬忠行など他の戦後主体性論者のものも読み進めていったし、そこから板倉聖宣と仮説実験授業、更には弁証法を武道の理論に応用している南郷継正等にも大きな興味を抱いた。

冒頭に引いたエドガー・アラン・ポーの推理小説等の面白さも三浦つとむから教えられたものである。「盗まれた手紙」の「あまりに深謀すぎたり浅慮しすぎたりして失敗する」とか「隠すために隠さない」といった言葉はまさにディーツゲンの『人間の頭脳活動の本質』（岩波書店、1952）に示されている弁証法的思考そのものである。「相手と知力を合わせる」も、言語の1人称における「観念的自己分裂」と同様のことである。こうした推理小説における「謎解き」の面白さは言語の謎解きにも通じるものであったのだ。また、三浦はしばしば「独学のすすめ」を説いており、私も、多くの恩師がいるが、しかし学問というものは本来は「独学」であると思っている。

三浦つとむを通しては、更に、「構造言語学の変形としての変形文法——チョムスキー『言語と精神』の批判——」（最初1970年に吉本隆明発行の『試行』第31号に掲載され、その後、『英語はどう研究されてきたか』（季節社、1980）に収録）を書いた英語学の宮下真二とも出会った。実は、大学1年の時、一般外国語の英語の授業で担当の先生に「チョムスキーを教材にしてください」と頼み込んだことがあり、変形文法には興味を持っていたが、宮下さんの論考を読んで目から鱗が落ちた感じがした。その論文を紹介してくれたのが三浦つとむであり、そこから宮下さんとの交流が始まったのだ。彼とはその後、私の初めての著書（共著）である『現代言語学批判』（勁草書房、1981）を出すことになったが、この本の中で私は『馬氏文通』（1898）以前の中国人の語の分類」を論じ、中国伝統の虚实論と鈴木胤一時枝誠記の詞辞論が西洋のポール・ロワイヤルの語の二大別と同じ見方であり、これこそが言語の普遍性であることを説いた。この考え方からすれば、文は主語＋述語からなるのではなく、主語と述語はいずれも客体的表現であり、文とは主体的表現と客体的表現から構成され、『馬氏文通』でいう「構文之道、不過實字虚字兩端、實字其體骨、而虚字其性情也」とはそういうことであることを述べたが、これは宮下真二の「ポール・ロワイヤル文法の再発見」（これも元は1973年『試行』第38号に掲載され、後に『英語はどう研究されてきたか』に収録された）から学んだことである。

生き急いだ彼からは短い間に本当に色々なことを学ぶことができた。彼の以下の言葉は今も私の心の中に響いている。

どんな分野の人であらうと、またどんな時代の人であらうと、通説を鵜呑みにせず、対象と格闘してゐる人の姿が一番励みになります。御研鑽を祈ります。(1976.1.19の手紙より)
自ら問題を発見し、真摯に取り組む限りは友が現れ、師が見つかるものです。(1977.4.13の手紙より)

今のうちは、研究の進み具合にまだらっこしい思ひをなさるかも知れませんが、対象の輪廓を掴み対象の観察の蓄積がある水準に達すると途端に対象の方から大小の無数の問題を突き付けて来るやうになります。さうすると論文がどんどん展開し、どんどん具體化してひとりでの有機的に發展して行くかのやうな感じがする程です。常に対象の全體に注意しながら部分を吟味することが大切だと思ひます。リンゴの皮を剥くやうに全體を薄く剥きながら次第に芯に迫るべきだと思ひます。(1977.8.8の手紙より)

彼が残してくれた言葉の中でも特に「通説を鵜呑みにせず」「権威に盲従しない」というのは今も私の座右の銘となっており、私が畏友沈国威氏と2000年に組織した「近代東西言語文化接触研究会」の機関誌『或問』に掲げた以下の「発刊の辞」はここに由来している。

……一定の水準を満たすという条件の下で、その掲載を拒否しない。ただ、私たちが取る唯一の基本的立場だけは示しておく。

「学問（真理）の前では何人も平等である」という立場である。

そのことは「通説を鵜呑みにしない」「権威に盲従しない」という立場でもある。そしてその前提として「先ずは疑え」が存在する。「なぜ？」という問いかげがなければいかなる問題も生まれてはこない。『或問』と命名した所以でもある。……(『或問』創刊号、2000.10.1)

この後、大学3年あたりから中国語学を本格的にやろうと決心し、大学卒業後(1973年)大阪市立大学の大学院に進学することになったが、まず、最初に自分の中国語の力のなさを思い知るようになった。

当時、市大で助手をされていた佐藤晴彦氏(神戸市外国語大学名誉教授)の中国語を聞いた時、「何だこれは？」と驚いた。世の中にはすごい人がいるものだと感心するばかりであった。

また、一つ上の先輩には荒川清秀氏(愛知大学名誉教授)がおられた。彼の現代語から古典語までを万遍なくこなす語学力はもちろんであるが、何よりも学問に対する積極性、バイタリティーに感服した。

このお二人との読書会を通して私の語学力は鍛えられたのであり、研究面でも現在に至るまでお世話になっている。

大阪市大では香坂順一先生、宮田一郎先生、望月八十吉先生のご指導を仰いだが、香坂先生

からは「雑学」の重要性を、宮田先生には福井大学時代から「確かな読み」の大切さを教えて頂いた。宮田先生は、よく「私はあるテキストを授業で使う場合、あらかじめ必ず3回は精読し、全語彙索引を作ってからでないと使わない」とおっしゃっておられたが、私にはまだそれを実践できていない。また本田済先生からは幼少の頃からの「素読」にもとづく古典の読みの凄さ、奥深さを身を以て体感した。

1978年3月に大学院を修了後は、これも偶然の巡り合わせで、その年の4月に福井大学に就職した。

福井大学在任中の1987年から1988年にかけて日本学術振興会の特定国研究者派遣によって呉語研究の目的で上海の復旦大学（受け入れは中国語言文学研究所の許宝華先生）に赴いたが、そこでまた新しい大きな出会いがあった。

当時、上海ではそれまでの中国言語学の伝統を破って「現象（eXist）」の記述だけではなく「何故（whY）」を問うべきと主張する青年「現代言語学グループ（現代言語学のローマ字ピンインの頭文字であるXYと、eXistとwhYのXYをもじってXY派と呼ぶ）」が活動を行っていたが、その中心メンバーが文法学の復旦大学中文系の申小龍氏、方言・音韻学の復旦大学中文系の游汝傑、蘇州大学中文系の石汝傑、上海大学中文系の錢乃榮の各氏であり、そして理論的、指導的役割を果たしたのが復旦大学歴史地理研究所の周振鶴氏であった。なお、XY派のスローガンは「吾愛老師、更愛真理」であるが、これはまさに上述の「通説を鵜呑みにしない」「権威に盲従しない」に相通ずる思想である。

さて、周氏との出会いは極めて「必然的」なものであったように思われる。

私は、上海滞在の約10ヶ月、ほぼ毎日（これは決して誇張ではなく実際雨の日も風の日もほぼ毎日なのだ）古本屋、古本市を巡り歩いていた。毎日行くのには訳があり、もし私が行かない日に新しい古書の入荷があった場合、他の人に買われてしまうのを心配したからである。そこでたびたび山のように積まれた古本をまとめて買って行く中国人を目にしていたが、それが周氏だったのだ。ある日、縄でくくられた本の山に届け先が書いてあるのを見ると、「復旦大学周振鶴」とあるではないか。周氏の名前はそれまでに『方言と中国文化』（中国における「文化言語学」の嚆矢とでも言うべき名著。日本でも私の監修で日本語訳が出版されている）の著者として知っていた私は、彼がその場に現れるのを待って、思い切って声をかけることにしたのだ。その日以来今日まで、彼との交流は続いており、単なる「ことば」だけでなく、歴史、地理、物理、科学、芸術等々広い意味での「文化」を含むいわゆる「学際的研究」の醍醐味を教えられた。それまでの私の言語研究一辺倒から新しい研究に向かう大きな転換点となった出会いであった。

福井大学には12年間勤務し、1990年に現在の関西大学に移ることになったが、私の「言語と文化」に対する関心はますます強くなっていった。それはそこにこの分野での先駆者、第一人者である尾崎貫先生や幅広い研究の視野を持った日下恒夫先生が居られたことも一つの理由

であったし、東西学術研究所と増田渉文庫の存在がまた大きかった。東西学術研究所では歴史学の大庭脩先生、藤善真澄先生、松浦章先生、藪田貫先生、美学の山岡泰造先生といった異分野の先生方との共同研究を通して多くの専門外のことを学ばせて頂いた。さらには沈国威氏との出会いも私の今の研究に拍車をかけた。沈先生とは関大にお招きして以来、今日までほぼ毎日研究室で顔を合わせる「腐れ縁」が続いている。

関大に来てから8年目の1998年から99年にかけてのハーバード大学での在外研究が2度目の私の研究における転換点となった。

それまで中国を始めとするアジア圏しか行ったことのなかった私であったが、初めてのアメリカで毎日図書館に通い大量の欧米人の中国語研究の資料に触れることができ、そこから、研究のテーマが現在の東西言語文化接触到シフトして行ったのである。また、その間、ドイツ・ゲッティンゲン大学での国際シンポに参加し、そこの主任教授であったラックナー（現在はエアランゲン大学）教授とその門下生達やローマ大学のマシーニ教授など多くの欧米の研究者との交流も始まり、その年以降、この20数年間、毎年、頻繁に国際シンポジウムを開催するようになった。

昨年2020年はコロナ禍で渡航ができなくなったが、それまでは毎年夏はローマ大学で院生も含めたシンポジウムを開催したり、バチカン図書館などでの資料調査を行ってきていた。

言語接触研究を私と沈先生が始めた頃はその分野の研究者は世界でも数えるほどしかいなかったが、北京外国語大学の張西平教授や李雪濤教授、中国科学院自然科学史研究所、中国社会科学院歴史研究所などとの学術交流が深まるにつれ、関心を持つ研究者が年々増え、今や、中国では一大ブームとすらなった感がある。北京外国語大学歴史学院内には近代東西言語文化接触研究センターも開設されている。

関西大学では着任以来ずっと東西学術研究所で研究員をさせてもらってきたが、特に、2005年からは、東西研をベースに組織されたCSAC（アジア研究センター、2005-2010）、CSACII（アジア文化研究センター、2011-2016）、更には文科省グローバルCOEプログラムに採択されたICIS（文化交渉学教育研究拠点、2007-2012）、そして、現在の私立大学研究ブランディング事業のKU-ORCAS（関西大学アジア・オープン・リサーチセンター、2017-2022）のメンバーとして研究活動を行って来れたことも私の研究人生では極めて大きな意義を持っている。この15年間の活動は研究者として最も充実した時間だったように思われる。特にグローバルCOEで私たちが提唱した新しい学問体系である「文化交渉学」の重要な方法論の一つである「周縁からのアプローチ」は、元々は言語文化接触研究から生まれたものであり、この「文化交渉学」が今や世界的な認知を受けて各国で同じような研究が進められていることを嬉しく思っている。また、G-COEによって開設された東アジア文化研究科では毎年10名前後の大学院生が私の下で研究を行い、これまですでに30数名の院生が博士の学位を取得しているが、こうした優秀な学生を育てて来れたことも教師冥利に尽きるというものである。振り返れば、福井大学時代か

ら私は良い学生に恵まれてきたように思う。

ところで、私は2009年の3月まで自分の住まいする市の教育委員というものを2期8年間務めた。この間、特に、教育再生や教育基本法の改悪、学力テスト結果の公開をめぐる、朝日新聞「私の視点」などに自らの意見を開陳し、しまいには、前代未聞の「教育委員が日教組全国教研集会で講演」ということで、右翼からの執拗な攻撃を受けたりもした。しかしながら、これも私の中では自らの研究の方法と何ら変わることはない極めて当たり前のことであった。

この国の教育が現在のような状況に至った根本原因を深く問いただすことをせずに、いわゆる「対症療法」で、場当たりに乗り切ろうとするとところに問題があるのであり、それを貫く原理は「強者の論理」と「あれかこれか」の論理であることを指摘したに過ぎないのである。

実は、このことは最近の日本の中国語学界でも同様の側面が見られる。辞書を取り上げたかと思えば、アспект、あるいは存現文という風に、場当たりにトピック探しをするだけで、中国語全体を見渡した議論、体系化の議論がおろそかにされているように私には思えてならない。個別的な現象は随分明らかになったのに、それが個別で終わり、全体にならないのだ。これだけ研究が進んだのに、私たちはいまだに一冊の藤堂明保著『中国文法の研究』（江南書院）を超えるものを手にしてはいない。各論は確かに一歩進んだのに、総論においてはむしろ一歩も二歩も後退しているかも知れないのだ。実はそれはひとえに、言語観、方法論が欠如しているからだとは私は考えている。「言語とは何か」「文とは何か」「主語とは何か」「述語とは何か」という本質的・原則的な問題から真正面に向き合うべきなのに、すぐに「了がいる、いない」とかいった各論から始まるのだ。国語学の分野でも同じで、果たして時枝や山田、橋本を超えるものが存在するかどうか疑わしい。個の寄せ集めは、結局は個に過ぎないのだ。「個と全体」、「個別と一般」、「特殊と普遍」、或いは「周縁アプローチ」における「周縁と中心」という相対立するものを「あれもこれも」というように弁証法的に統一させることを常に念頭に置くべきであり、何よりも、私たちは、冒頭に掲げたポーの言葉を今一度かみしめるべきではないかと思っている。

“路是人踏出来的。(道は人が歩いてできるもの)”

これは私が大阪市大の大学院に入学したときに、恩師の宮田先生が私に述べられた言葉であるが、もちろん恐らくは魯迅に出自するこの言葉を今再びかみしめている。退職という人生の一つの区切りを迎えた今、前を望む時、道はまだ遥かに遠い。これまでの多くの出会いに感謝しながら、ここからまた新しい一步を踏み出すしかないだろう。人生未だ旅の途中である。(了)

